
× × ドール

ルーツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

××ドール

【Nコード】

N6893K

【作者名】

ルーツ

【あらすじ】

世界が天変地異によって滅んだ後の世界。人は過酷な環境下で生活をするために『ドール』という人型アンドロイドを作り出した。一話だけの予告小説です。

殺戮人形の章

硝煙と血風の匂いが、夕闇に染まりかける赤黒い空に充満している。

草木一つない寂れた野には生の気配はなく、ただ置き去りにされた残骸の山だけが乱雑していた。

無惨にも破壊された手、足、頭、胴体の山。五体が満足にあるものはなく、いずれもがその肢体を引き裂かれている。

これだけを見ればかなり猟奇的な光景であり、一般人なら目にしただけで悲鳴を上げて卒倒してしまうほどの場面。

しかしばらまかれている臓物の中に僅かに見える金属光と、肉体の断面から覗く血管とは明らかに違う藍色の管が、それはただの人死体ではないと証明していた。

ウィーン、と荒野に流れる機械音。

バラされた体から洩れる音が、埋め込まれた機械の存命を告げていた。

ギギギ……ガガ………ジジジジ………

回路がショートしながらも再起動を始める。

エンジンが回転し、機体を動かす為の疑似血液が推定半分になった体に巡る。

“彼”は、ほんの一時間前に始まったこの惨劇の中でも奇跡的と言えるくらいに原型を保っていた。

左腕は肩ごと抉り取られ、右手は二の腕から切り落とされ、下半身は圧縮式高出力エネルギーの奔流に吞まれ二百近い同胞と屑鉄に

なっている。だが、まだ他のものに比べると遥かにマシな被害だった。

顔面に幾つも輝が入り、崩れかけのビスケットのように脆く、今すぐにでも瓦解しそうだが、それでも人体で言う心臓部に内蔵された駆動体はエネルギーの余波による衝撃に一時的に停止しただけで、この短時間での復活を果たした。

キューーン

駆動音が滑らかになる。

半分から先が無くなった右手で彼は上体　今では上体が全身ではある　を起こそうとする。

しかしやはり右手だけ、それも半ばから途切れた片手だけでは満足に動くことすらできずにまた倒れ込む。

その際に反動で仰向けとなり、彼の視覚情報統合部位にまるで血塗られたような空が光を通じて送られてきた。

だからどうした、と言うのか。

彼は、否、ここで今や残骸となっている“彼ら”が人の形を保っていた頃も、感情を動されたりしない。

前提として、動かされるべき感情というものが在りはしない。

精製されてからの一度も、そんなプログラムはインプットされていないのだから。

彼らは自意識を持たない。

“持ち主”に命じられるがまま、“製造者”に造られたまま、組み込まれたプログラムによって動く。

何も考えることなく、何も捉えることなく、ひたすらに作業に従事する。

その様は、まるで『人形』のよう。

ギギギ……

間接部に砕かれた破片が入り込んだのか上手く動かせない。ガタ、

ガタと震える腕で二度、三度と身を起こそうとする。

組み込まれたプログラムに従い、戦闘行為が不可になった際のマニュアルデータが彼を動かす。

その時。

発破。

硝煙。

引き金を引く音と共に彼の胸部に拳大の穴が空く。

正中線から少し左にずれた部分。駆動体コアが、寸分の狂いもなく撃ち抜かれていた。

知覚したのはブラスターを構えて先の惨劇と変わらず、作業をこなすように引き金を引いた白髪機の姿。

直後溢れだす機体部位からの山のような被害申告。

視覚データの取得・エラー

聴覚データの取得・エラー

触覚データの取得・レッドアラート

疑似血液の循環・停止

思考回路・シヨート

機体維持プログラム・不可

送られる情報が伝えるのは、すぐ先にある彼の廃棄のみ。

電波妨害をされているかもしれないが、刻まれた行動プログラムの手順に則り最善の行動をする。

【白髪、身長推定・178、823、重量推定・79、使用武器・圧縮ブラスター、振動刃ブレイド、身体能力推定・S、状況処理能力推定・AA、被害・『戦闘人形』ソル・ドール782機、北部連盟研究所3棟、情報総合・対象を上級機『殺戮人形』キリング・ドールに認定……】

最終プログラムに指されている行動をもはや動くことのできない機体で行う。彼が得た敵機データを本国へ転送した。

あまりにも稚達で幼稚な文脈だが現在の処理能力では致し方ない。ここまで出来たのだから十二分に奇跡だ。すでに疑似血液は体外に流れ出てしまっている。

ノイズが走る。駆動音が弱くなる。

本国に情報を転送した彼が最後に感じたのは、視覚一面に広がる白と黒の砂嵐だった。

北方技術大国『マキリア』。

この世界で陸地の約半分という広大な土地と、他国の追隨を許さぬ先進した技術力を確立した大国。

人口は約2千8百万人。世界人口が2億2千万人であるこの世界の中でも最下位に位置している。

領地が北方全てというその国土に反して領民は全体の10分の1。北の土地はその極寒と命の芽生えない大地から、『恒久氷土』^{コキユートス}と呼ばれている。

陸地島々の全てが分厚い氷によって支えられている為、人が、生き物が生活する上で非常に酷と言わざるを得ない。

草花はごく僅かな種類しか生きておらず、動物も人間以外にはまた数種しかない。

そんな土地に存在する唯一の高層建造都市『リグラ』。

吹雪く中途切れ途切れに覗く、高層の建物が次々と並んでいるその様はまるで墓標のよう。

その中でもより天に届かんとばかりに聳える一棟の“城”。城とはお世辞にも言えない歪で無骨な形状のそれは、分厚い雲の中に突き刺さるようにしてそこに在った。

王城塔『グローリア』。

旧世紀と呼ばれる先時代。天変地異によつて人類は一時期地球上から絶滅した。その際に旧世代の人々が生き残るべく設立した避難塔。

約数百から数千年前。北では氷河期然の有り様になり、南は殆んど砂漠化、東は海に埋没し、西には暴風が吹き荒れる。

火山は噴火し、大地は割れ、雷鳴が轟き、雷雨が降る。日の光は分厚い塵雲に遮られ、植物は枯れ、動物が死滅し、かつて“地球”の名が着いていた命の星は、一転して死の満ちる惑星になってしまった。

造られた塔も自然の猛威には耐えきれず、結果、人々も全てが地球上から死滅する運命を変えることはできなかった。

だがそれから時が流れ、また生命が誕生して、文明を築く。

しかしいくら時が流れようとも人にとって下界の環境は未だ生きるに辛すぎる環境であつた。

ゆえに先時代の遺物にあつた科学の力で建てられていた一つの傾きかけの塔、グローリアに人々は住み着いた。先代の人間と同じように。

絶頂時の天変地異を受けて傾きかけていた塔も、治まってきた異変に耐えるのは造作もなかつた。

人々は塔へ避難し、生活しながら、科学の力を一端だが解き明かし、人々は増えてきた人口に対処するべく外へ高層建造物を建築した。

そして一つの都市が産まれた。

それが『リグラ』である。

王城塔グローリアの最上階から三つ下。王間に座する一人の男性と一機の男製がいた。

玉座に座するのは全身を真っ赤なコートに身を包んだ長髪の男性。口元は固く結ばれ、まだ青年とも言える年齢だろう外見からは威風堂々とした“王”の風格が溢れ出している。並の人間ならば彼の言葉にそれこそ木偶のように付き従ってしまう、そんな雰囲気は彼は纏っていた。

そしてそんな男性に機械的に跪く成人男性の形を取った物。人形。

こう聞けば子供の頃、万人が共通して興味を持ったことのあるだろう玩具を思い浮かべられるだろうが、ここでは別の意味を示す。

自律思考型アンドロイド。

通称「人形^{ドール}」。

技術大国マキリアに於ける最大にして最高、技術の粋と粋を紡ぎ合わせて造り上げた機械人形である。

この北方に於いて、一番問題視されたのが労働力である。ただでさえ人口が少ない上に外は極寒。自然、都市を造る際に最大の問題となった。

新たに生まれた新人類は旧世代の人類に較べて順応力が高い。ゆえに僅かならば外での行動も可能であるのだが、生物としての限界は当然存在する。

ゆえに造り上げたのが人形^{ドール}。

痛みを感じず、熱寒を感じず、プログラムされた命令通りに動く機械人形。

旧世代の遺物からさらに発展させて彼らはこれを完成させ、王都市を造ることに成功し、技術大国として名を馳せることとなった。

そして現在、男性の前に跪く彼も人形^{ドール}だった。

白髪に、無駄のない均整の取れた肉付き。瞬発力、持久力を兼ね備えた筋肉を、高速戦闘の阻害にならないように無駄なくバランスよく肉付けされている。頭部には街一つ軽く管理できるほどの演算能力。

与えられた武装を巧みに操り、敵を殲滅させるためだけに造られ

た戦闘用人形機種序列三位“キリング・ドール殺戮人形”。

『KD-000』。

それが、彼の呼称だった。

「今回も御苦労だったなKD-000。単機での『ラインバレル』北部第四研究所制圧、見事だった」

成人男性にしては高いその声。辺りに透き通る鈴のような声色とは裏腹に、言霊によるものか、重くのし掛かる圧力が感じられる。

玉間の脇に控えている王直属の付き人達の体が若干強張る。怯えや恐怖から発する硬直ではなく、心底心酔しているからこそ沸き上がる畏怖。仕えて長い者は彼がまだ舌足らずな幼い頃から共にいたが、この感覚に慣れることは未だない。王の発する気は並の者では当てられただけで意識を彼方へと飛ばしてしまうものであった。

「ありがとうございます」

無機質な声。多少の緊張を露にする付き人達に対して、KD-000は感情の籠っていない声を返すのみだった。

敬いの心など産まれた時から持ち合わせていない。

形だけは跪ずくという服従の態度を取っているが、それもただプログラムされたゆえ。

総じて、上位種の機体には曲者が多い。

彼らは製造過程で天運とも呼べる偶然と運命とも言える必然が重なり合って誕生する。上位機種に限った話ではあるが、他のドールとは違い、彼らは製造方法が確立されていない。

なぜ産まれたのか、様々な学者が研究を続けたが、ブラックボックスよりも難解で複雑なものが邪魔をし、天文学的な数値の上でしか誕生しないということしかわかっていない。

さらに言うのなら彼らは自意識という人形には不必要な、そして人形を否定する要素を持っている。

自分で計算して動くことなら他のドールでも十分可能だが、彼らは埋め込まれた自意思に方向性が付属されていた。

例えば怒り、例えば笑い、例えば嘆き、例えば喜び。皮肉にも過

去確認された上位種は大まかに別けた人間の感情の一つだけを継いでいた。その為、プログラムされたことだけをひたすら従順に繰り返すただのドールと違って、上位種はその能力も思考回路も逸脱している。

そして此処にいるKD・00は『無情』を司るドール。

感情四別とは違う位置にあるイレギュラーの無情。機体能力は突飛しているが、何に対しても無関心、無興味。

自身がどうなるかと、王がどうなるかと、国がどうなるかと、彼は無情で居続ける。それが彼の“存在定義”なのだから。

それだからこそ、彼は王に気に入られているのかもしれない。

「新型とはいえブレード一本とブラスター一丁である土地を制圧できるのはお前しかいまい。今日は研究所で検査を受けた後ゆっくりと骨を休めるがいい」

「御心遣い、しかと受け取りました」

王が功績を讃え、人形が無感動に返す。

このやり取りもまた一種の儀式^{プログラム}。

無の人形を自らに縛り付ける術式。

場の空気が一気に弾け、はりつめていた空間が緩んだ。

と、同時に。

「あー、つたく面倒くせー。毎回毎回んな固っ苦しいやり取りとか飽き飽きしちまうぜ。一回の任務ごとに行動指向の上書きとか疲れるっつーの」

そう発言したのは玉座で脚を組んだ青年。

先の威風堂々とした空気を剥ぎ取り、彼は素の顔を出した。

「高慢ちきなラインバレルの連中の鼻っ柱をへし折る為とはいえ、面倒なことは結局面倒でしかないんだよな。それとももう全軍一気に送って制圧するか？ うーむ、でもそれじゃつまらんし……だからKD・00を単機でいつもやってんだしなあ」

誰に聞かせる訳でもない一人言のように王はぶつぶつ呟く。

純心な子供みたいに表情をこころ変える彼は見た目よりも幼く

見えた。愛らしい仕草に思わず頬を緩ませるほどに。

先の会話の通り、いまこの国は戦争の真っ只中である。

東に浮かぶ島国“ゴコウ”。

西に座する教国“ルイン”。

南に位置する熱国“ファイネス”。

その三国による集合、連合国『ラインバレル』。

五国しか存在しない世界で、マキリアは世界の5分の3を敵に回していた。

切っ掛けなど些細なこと。

ただ、国を統べるトップ同士の仲が悪かった。それだけ。

付属として資源を得る為だの科学力の偏りをなくす為だのと臣民には伝えられているが、本音を知っている直属の部下たちはいつ全面的な戦になるかと恐々している。

戦力という面においてはゴコウが、資源力という面においてはファイネスが、統率力という面においてはルインが、そして科学力という面においてはマキリアが。例外と言える残りの一国には歴史がそれぞれが面白いくらいに何かしら突出しているせいで、支え合わなければ生命に厳しいこの世界で人間という弱種は生きていけないようになっていた。

その五つ天秤を乱したのがマキリア。科学力を操り一国だけで、他に頼らずとも存在を可能とした大国。

クローン技術による食材の増量、人形開発による労働力の確保、国を丸ごと包みこむ耐環境ドーム。

発達し過ぎた科学力に周りは技術の提供を要求したが、マキリアの王はそれを無視し続けた。

元々仲が悪かった彼らは当然口論だけで済むはずもなく、いさかに発展し、国を巻き込んだ喧嘩と相成った。これが六代前の王たちの起こした出来事である。

六代前の王たちが死去してからも国との交流は断絶したまま現在も争いは続いており、現代の王たちの仲もまた、悪かった。

そして、今代マキリア王は好戦的かつ快樂家。しかし愚鈍ではなく切れ者としての面もある。

戦闘回数が激増したのはいうまでもない。

「ま、いいか。後々の楽しみのためには多少の面倒にも目を瞑ろう」
うんうんと頷きながらマキリア王は側付きの女性からグラスを受け取り、中に入っている赤い液体を美味しそうに飲み干して満足そうに笑みを浮かべる。

元から根気のない彼はこうやってすぐに物事を簡潔にまとめてしまふ。だが、まとめた事が全て最善に働いてしまふのだから恐ろしい。

信頼され、支持される。

西のルインにいる教皇も民に信奉されているが、こちらもある意味そうだと言えるだろう。

「ああそうだ、KD-00。今までの功績を讃えてお前に褒美をやることにした。受け取れ」

指をパチンと鳴らして付き人に指示を出す。

「……………」

パチンパチン。三度目にしてやっと燕服を来た初老の男性が慌てて動き出す。

男性の顔には驚愕の表情が貼り付いており、周りの付き人たちも同様に固まっていた。

今王の言ったことに彼らは理解が及ばなかったからの停止。

人形ドールとは、即ち“道具”。

車と同じ。ガソリンが切れたなら入れ、部品が壊れたら交換する。よりよい機能の物があれば買い換える。

とどのつまり、人の形を取ってしようと、この世界の人間に取って人形とはモノでしかない。

自分の道具に感謝する人間などいない。

いるかもしれないが、それは愛着となんら変わりなく、感謝ではない。

道具に褒美など必要ないのだ。

この考えは人間たちの予防線、自分たちと同じ姿を持つ物に対して“扱う”という行為に罪悪感を感じないようにする為に必要なものだった。

“人形を人間扱いしてはならない”という忌避感を彼らは産まれながらにして持っている。これがなければ、人と人形の境目は曖昧になり、人形が人と同じ存在になってしまつと、本能で感じているから。

付き人たちの硬直も、王がKD-00に対して人間扱いをしたことによる、本能的な忌避によるためだった。

「失礼します」

王間に控えめなノックが二回鳴り、女性の声が扉の向こうら聞こえてきた。

先程出ていった燕服の男性が開けた扉を抜けて来たのは一人の女性。

宙に靡く薄翠色の髪、エメラルドグリーン陶磁器のように滑らかな肌、慈母のような穏和な物腰。

まるで“造られた”かのような美をまとわせた女性が漆黒のワンピースに身を包み、KD-00の横に並んだ。

KD-00は知覚データから彼女が人形であると認識する。人間には知覚不能なくらい小さな駆動機の回転音を、彼の聴覚機器はしっかりと捉えていた。

そんなKD-00の視線に気付いた女性は、その美貌を笑みに変える。

昔と違い、今の人形はプログラムされた表情ならば顔に浮かべることにも可能になった為、別におかしなことではない。

しかしその“笑み”は、造られた感じがしなかった。

全くと言っていい程、しなかったのだ。

王が笑う。こちらは意図して造られた笑み。

「^{トイ・ドール}愛玩人形」 『TD-49』。この世で唯一、『心』を持つ“人形”だ」

心。

知識データに登録されているその言葉を、初めて聞いたような気がした。

殺戮人形の章（後書き）

つづきをまったく考えずにノリで、リハビリリとして過去に作ったプロットを文にしました。続きを書くかは未定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893k/>

××ドール

2010年10月9日23時23分発行